

## 探討移居台灣之日本留學生 —以日本語文學系在學之「日本留學生」為例

百瀨英樹\*

### 摘要

近年來決定到台灣的大學就讀日文系之「日本留學生」雖為數不多但有逐漸增加的趨勢。

為甚麼以日語為母語的「日本人」要選擇以留學的方式就讀海外日文系呢？本研究之出發點是為了知曉此類行為的動機，對此，今福已於 2020 年以問卷方式進行過志願調查，但本文探討之對象為認識論及關係論建構之下的「日本留學生」。在所謂「日本留學生」凝視中，他（她）們過著甚麼樣的大學生活呢？這些學生們不管從入學之前的過程、從民族性、或是從日文及中文的語言能力分級的觀點來看都有多樣性的目的。因此本研究將不透過問卷調查，而以採訪及參與觀察方法以描繪出對象之民族誌。

爾後，本文將以此為開端持續進行關於移居台灣之「日本留學生」相關研究。

關鍵詞：日本留學生、推拉理論、民族誌、跨國主義

---

\* 世新大學日本語文學系講師

# 台湾に移住する日本人留学生たち—日本語学科在籍の「日本人留学生」の語りから

百瀬英樹\*

## 要旨

近年、台湾の大学の日本語学科に進学を決めた「日本人留学生」が増加傾向にある。日本語ネイティブの「日本人」が、なぜ留学という国際移動において日本語学科を選択したのだろうか。本研究の出発点は、その理由や目的、現在考えていることなどを理解したいという動機によるものであるが、その点に関して今福がすでに質問紙による意識調査を行っている。しかし、本稿で扱うのは、認識論的・関係論的に構築された「日本人留学生」である。「日本人留学生」というまなざしの中で過ごしてきた学生たちは、入学までの経緯も、エスニシティの観点からも語学力のレベルの点でも多様であるため、本研究では、インタビューと参与観察を採用し、彼らのエスノグラフィを描き出していく。

キーワード：日本人留学生、エスノグラフィ、トランスナショナリズム、プッシュ・プル要因

---

\*世新大学日本語学科講師

## 1.はじめに

かつては日本への留学生の送り出し国であった台湾が、近年、日本からの留学生の受け入れ先として注目されつつある。以前、台湾に関心を持つ日本人留学生の多くは、中華社会もしくは台湾社会を研究対象として「観察されるものとしての台湾」を訪れてきたが、現在では、専門性の高い学問を修得する場として、積極的に台湾の大学を選択する日本人学生が急増しているのである。ここ数年の間に目立った傾向を見せている現象のせいか先行研究はほとんどなく、特に、彼ら彼女ら一人一人のエスノグラフィを描き出したものは皆無と言っていい。彼らはなぜ海外留学を志向し、その行き先として台湾を選んだのか。その背景にあったものは一体何なのか。台湾での留學生活で何を感じ、どのように過ごしてきたのか。大学の卒業後には、どのような選択があったのか。本研究の目的は、そういった一人一人の生活誌を紡ぎ出していくことにある。その端緒として、まず、日本語学科に在籍した経験を持つ、ある「日本人留学生」に注目したいと考えている。すでに修得済みの日本語を、なぜわざわざ台湾へ来て学ぼうとしたのか、一見すると極めて捻じれた選択行為の背景には何があるのか、彼女へのインタビューと参与観察を通じて、この一つの特異な事例から、訪台日本人留学生の一側面を描き出したい。

## 2.インタビュー調査の報告

### K・Sさん（女性／26歳）

#### <渡航・留學前>

1994年、長野県U市生まれ。父(61)、母(51)、兄(28)、弟(22)の五人家族で、祖母と同居(2021年時点)。父親は薬品会社に勤めており、転勤族。母親は市役所にパートタイムで勤務。兄は日本の大手建設会社勤務で今年から志願してコートジボアールに駐在。弟は地元の食品加工会社に勤務。K・Sは、中学では積極的に学級委員や運動系の部活動に参加し、その後、地元からやや離れた女子高に進学。活発な学生時代を過ごし、小さいころから中東系の航空会社のCAに憧れていたという。

「両親の趣味が海外旅行で、子供たちを祖母に預けて、二人でよく海外旅行に行っていましたね。ヨーロッパが多かったです。母親は地元の短大の英文科を出て、文通が趣味で、ペンフレンドがたくさんいました。何か季節のイベントがあると、いろいろな国の人からギフトが届くんです。オーストラリアの学生をホームステイで受け入れたりもしていましたね。」

K・Sは、幼少期より異文化交流の賑やかな家庭で育った。U市は、県内でも比較的外国人労働者が多い地域である。市役所に勤務する母親には、インドネシアやベトナム、ブラジルからの同僚もいて、市主催の多文化交流フェスティバルや外国人スピーチコンテストなどに関わる機会も多く、母親とそういったイベントに参加することを楽しみにしていたという。

「私のうちでは、中学を卒業した春休みに、高校合格のお祝いとして海外旅行をプレゼントしてくれるんです。両親と私だけの三人旅行です。兄の時は香港だったかな。私の行き先は台湾で、それがすごく楽しくて印象的で、将来またここに来たい！って一発で思いましたね。」

なぜ台湾だったのかに関しては、おそらく地理的な近接性や安全性、価格のリーズナブルさなども関係していただろうが、何より、父親に台湾出張の経験があり、その時の体験から勧められたものであるらしい。高校卒業後の進学に際しては、学内の成績もよく、指定校の推薦枠で国内の大学の中文学科への道も考えたが、台湾に行ってみたいという本人の希望に親の後押しもあって、台湾の大学へ進学することに決めたという。

#### <渡航後・留学期間>

##### F大への入学

進学先は、語学センターを併設している新北市の私立F大に直感的に決定した。インターネットで情報検索をして好感を持ったからだという。2013年3月から同語学センターで中国語を学び始め、その1年半後の2014年8月、外国籍学生の枠を利用して、同大の英文学科に入学することとなった。なぜ英文学科を選んだかについては、「やりたいこととか特に見つからず、これしか思い浮かばなかったから」で、期待していた大学生活は、「ただただつらかった」という。

「…毎日お腹が痛かったです。もうまったくついていけないんです。たぶん、外国人枠って、学力的に本来入れないような大学にも入れちゃうことがあると思うんですよね。どうにもならない学力の差ってものを初めて味わいました。語学の名門校だから、エリート意識っていうか、私なんて相手にもしてもらえなくて。」

交友関係と言え、留学生向けの中国語の授業のクラスメートくらいで、他校への転入が決まるまでの2年間は、授業にも出ず、充実感のない日々を過ごしていたという。

##### S大への転学

同様の経験をし、馴染めないまま退学して日本への帰国を選んだ留学生も少

なくなかったが、K・Sは、帰ろうとは思わなかったという。意地だとか負けん気からというより、つらい状況にありながらも、生活上の居心地の良さは感じており、この環境から離れたくないという思いが強かったからだった。また、不思議と何とかなるような気がしていた。転学を決めた彼女は、一年次の二学期からその準備に取り掛かる。とはいえ、言葉を使って外国人とコミュニケーションすることしか関心が湧かず、少しは自信のあった英語でも完全に心が折れてしまった状況では選択肢は限られていた。

「…もう日本語学科しかチャンスがなかったんです。編入にしても試験はあって、もう外国人枠は利用できませんから、国語（中国語）とか、試験勉強をバリバリにやってきた台湾人に勝てるわけじゃないじゃないですか。」

2016年の夏、合格できると思っていなかった私立S大の日本語学科に転学が決まる。二年次からの編入になるが、中国語による授業も多く、単位の取得は思われているような簡単なものではなかったが、学生生活は充実していたという。

「日本に関心のある人が多いので、友達作りやすかったです。私も日本語を教えたり、一般教養科目の中国語の添削をしてもらったり。転学なので（取得しなきゃいけない単位が多くて）暇な時間はほとんどなかったですね。」

「日本人が日本語学科」ということで、引け目を感じたり、マイナスな視線を感じたりしたことはあったかと聞くと、

「…うーん、学内ではなかったですね。クラスメートはみんないい人でしたし、同じ日本人留学生も大変さを分っているせいか、あまり嫌な気持ちになることはありませんでした。引け目と言えば…、昔（F大時代）の（日本人留学生の）友達が、がんばって単位をいっぱい取ってる話を聞くと、『ああ、自分にはできなかつたな』って。…あと、正直、テストでは、あまりいい点数は取りたくありませんでした。クラスメートに申し訳ないような気持ちもあって。…マイナスな視線って言うほどのものでもないですけど、そういうのは、生活の中で時々ありましたかね。食堂のおじさんに、『なんで日本人が日本語学科なの！？』って言われたりとか。」

### <大学卒業後・就職>

就職活動で忙しくするこの時期に、一度だけ真剣に帰国を考えたことがあるという。日系の人材派遣会社が主催する就職説明会で、日本の学生の就職活動の様子や帰国後の就職可能性などについての講演を聞いた時である。これがきっかけで、一緒に参加した友人は焦りを感じ、帰国したが（その後、日本で大手物流会社に就職）、K・Sは、悩んだ結果、まずは台湾で就職活動を始めてみることにした。卒業後6か月間は就労のためにビザが延長されるが、その後の

ことはあまり考えていなかったという。どんな職種を希望していたか、という質問に対しては、「日本語と中国語を使ってコミュニケーションできる仕事なら何でもよかった」という。結果は、日系大手リース会社とアパレル会社、そして、旅行会社の計 3 社から内定を得ることができた。台湾の地元の会社は「ほぼ全敗」で、面接時に、「外国人を雇用するには、ビザの関係で、新卒でも最低 35000 元の月給を払わなきゃいけないんだけど、ウチはそこまでの日本語力を必要としてないから」とはっきり言われたそうである。採用された理由は何だと思いか聞くと、

「…たぶんですけど、3 社とも、すごく日本的な接客対応が必要な業種ばかりなんです。例えば、この旅行会社は、日本からの修学旅行生の案内業務でしたし、でも、業務上もちろん台湾人と多く関わりますから、両方の気持ち分かるという点では自信があるんですよ。」

K・S は、この三社のうち、最終的に日系大手リース会社を選択する。理由は、

「やっぱり一流企業ですし、安定感とか福利とかですかね。業務内容的には、旅行会社のほうが向いてるかなとは思ってます。でも、コロナが流行り出しちゃったから、この会社を選んで本当に良かったと思ってます。」

彼女の直属の上司に、採用の理由と「日本人で日本語学科卒」であることについて聞くと、

「…うーん。それ（日本人で日本語学科卒であること）を言う人もいるかもしれませんが…、正直、あの時、ちょうど欠員が出て人手が足りなかったんですよ。もちろん、誰でもいいというわけではないので、…あの性格ですかね(笑)」

仕事をバリバリこなすというタイプではない。マイペースながら、いつもニコニコとして、おおらかで人当たりの良い性格。ダメ出しされながらも、周りから可愛がられ仕事に励む様子が上司の話し方からもうかがえる。彼女の業務内容は主に、日系法人相手の自動車のリースの営業である。彼女に現在の仕事の状況について聞いてみた。

「日本人や台湾人のお客様といろいろお話ができるのは楽しいですが、やっぱり、つらいことは多いです。特に日本人のお客様は、駐在のホント偉い人ばかりなので、細心の注意を払って日本式に対応する必要がありますし、それが義務付けられているようでプレッシャーというか…。でも、それを期待されて雇われたのだから、仕方がないんですけどね…。」

日本に帰って働きたいか聞くと、仕事に充実感をにじませながらこう答えた。

「それはないですね。日本式にサービス対応をして台湾式の給料か…と思うことはありますけど、日系企業とは言っても、社員はほとんど台湾人ですし、

飲み会に出なきゃとか、そこまで強制されることはありませんから。」

### 3. 考察と今後の課題

今回は一つのケースに絞って紹介してきたが、今後、継続的にこういったインタビュー調査を積み重ねていく予定である。ただ、わずかではあるが、今回のケースからいくつか重要な知見が得られたので、以降進めていく研究の仮説作りに向けて整理しておきたい。

#### 3.1 日本人が日本語学科に在籍することについて

外国籍学生枠の入学に見られる学力のアンバランスさは、かねてから指摘されていたが、やむにやまれず選択した彼女の日本語学科での学生生活は、楽しんでアルバイトに時間を使うといったようなものではなく、「この足場で中国語を上達させる」「台湾人とのコミュニケーション機会を増やす」という彼女なりの目的があって懸命に過ごしたものだ。授業に対しては、「F大では第二外国語を日本語にしていたので、S大編入後は、いくつかの簡単な科目は互換できた」とり、「作文の授業では、先生の判断で中国語での作文にしてもらっていた」とり、彼女に合ったフレキシブルな対応があったことも重要である。今後、日本から台湾への留学生は、よほど特殊な状況にならない限り、増加することはあっても減ることはないと予想され、それと同時に、学力的についていけず、ドロップアウトする留学生も増加すると考えられる。日本語学科が、そういった日本人留学生の受け皿になる可能性も十分考えられるが、それには、学生自身、自分をどのように成長させるのか明確な目的意識を持っていること、また、学校側もそれに合った柔軟な対応ができることが求められるだろう。

就職については、ある教育関係者が、「日本人が（台湾の大学の）日本語学科を出たって、企業側からは、楽しんで学位を得たと思われるだけ」と言っていたのを聞いたことがある。しかし、今回のケースを見る限り、就職に対してそれほどのマイナス要因にはなっていないことがうかがえた。大手リース会社の面接では、そのことを聞かれることすらなかったという。もちろん中国語の習得は最低限のノルマであろうが、採用する会社側にとって重要なことは、その人材が業務内容にマッチするかどうかであり、ことサービス業においては、特殊なスキルより人柄のほうが重視されることがあるからである。さらに重要な要件は、人材を求める企業側の外的な事情である。「欠員が出て人手不足」というタイミングを逃さないためにも、数多く素早く就職面接にトライすることが大切である。ただし、これは雇用の流動性が比較的高い台湾社会のケースである。日本の就職環境の中でどのような影響があるのかは引き続き調査する必要があるだろう。

### 3.2 日本を出る・台湾に行く動機—プッシュ・プル要因について

留學生の研究にしても、国際結婚で日本を出国する女性の研究にしても、日本を出るプッシュ要因に関しては、集団主義や同調圧力の強さ、女性の構造的周辺化など、抑圧的で閉鎖的な日本のイメージが挙げられることが多い。しかし、彼女は、それをきっぱりと否定する。「…そういった理由で日本を出たわけではないですね。そもそも高校生だったので、まだそういったことを意識することもなくて。気にするようになったのは台湾に来てからです」。彼女が抱く「日本人らしさ」のステレオタイプなイメージは、出国前に形成されていたものではなく、渡航後の遠隔地・台湾にて形成され、それが彼女の国際移動の判断に影響を与えることになったという。この点に関しては今後再検討が必要であろう。

プル要因についてであるが、藤田は、ニューヨークとロンドンに留学に行った若者を「文化移民」と呼び、2003年から2008年までの5年間、彼らへのインタビューと参与観察を行っているが、その中で、アパデュライの「電子メディアによる『想像力の働き』が国際移動を促す」という仮説を援用し、国際移動に影響を与える、メディアによって形成されたイメージの重要性を強調している。しかし、今回のインタビューでそれを確認することは難しかった。ただ、彼女の台湾へのイメージを決定づけたのは、「観光旅行」という極めて直接的な体験であった。台湾と日本は、物理的な近接性の高い、海を隔てた隣国であり、こういった地理的条件を考えると、留学という国際移動に影響を与える要因の一つとして、「メディアによる想像力の働き」とともに、「観光体験によるイメージの形成」の重要性にも注目していいのではないだろうか。また、こういったことを踏まえつつ、今後、経済的条件や中国語のニーズの高まりなど基礎的なプッシュ・プル要因について、さらに整理していく必要があるだろう。

### 3.3 移動する人の『居場所』について

K・Sの口述から、彼女がいかにして台湾にある「日本」を活用し、「日本人らしく」あることに拘束されながらも、ときにはそれを利用して、必要性を感じたときには、「台湾人らしさ」のコンテクストを援用しながら自分の「居場所」を確保する、そんな姿を見て取ることができた。

彼女が何度も口にする「台湾が好きだから」「居心地の良さを感じるから」は何を意味しているのだろうか。彼女自身、激しい競争にさらされ、挫折し、周囲から見下され、時には騙されたり、厳しいノルマに押しつぶされそうになったりしてきた。彼女は言う。「みんなが『日本語学科に入って楽でいいね』って言うんです。…でも、本当に楽をしたかったら、あの時、帰ってると思う

んですよね」。そうまでして彼女がこだわった、「自分の居場所としての台湾」とは一体何なのだろうか。

藤田は、ナショナル・アイデンティティをめぐって、「文化移民」の2つのパターンを紹介している。一つは、いくら「国際人」を目指しても、結局、現地の人種的・民族的ヒエラルキーの下位に置かれ、「日本人」以外のアイデンティティの選択が難しくなり、ナショナル・アイデンティティが強化されるパターン、もう一つは、移住者が2つ以上の国に跨って、物理的または精神的に越境しながら活動・生活し、複数の「ホーム」を持つことによって「トランスナショナル・アイデンティティ」が発生するパターンの2つである。

彼女は、幼いころから「トランスナショナルな人」に憧れてきた。華やかなCAの世界には入れなくても、外国語を使って世界中の人と楽しく話をし、「日本的なもの」と「日本的でないもの」を行き来しながら活躍する、そんな自分をイメージしてきた。藤田の説明に従うなら、トランスナショナルな活動を実現するための最も基本的な条件は、「そのエスニシティが抑圧されたり、周辺化されたりしないこと」ということになる。「日本人であること」によって周辺化されることの少ない、ほどよく「日本人らしく」いられ、ほどよく「日本人らしさ」を回避できる場としての「台湾」に、彼女が自分の「居場所」を感じている理由の一つがあるのかもしれない。

## 參考文獻

- 藤田結子（2008）：〈文化移民－越境する日本の若者とメディア〉
- 今福宏次（2020）：〈正規日本人留学生を対象とした留学意識調査－日本語学科に在籍する留学生を中心に〉，《銘傳日本語教育》，23